ゼノン修道士の跡を追って - 「ゼノさん」の甥である私の回想録

まず初めに、本日こうして、私の伯父であるゼノン・ジェブロフスキ修道士を偲ぶ素晴らしい会に出席できましたことを、心から嬉しく思います。私が今、皆さまの前で身を包んでいるのは、ゼノン修道士が来ていたのと同じ、フランシスコ会の修道服です。この国で親しまれたゼノさんの甥である私が、ポーランドのフランシスコ会の宣教師として、日本で働くはずであったことに、きっと皆さまは驚かれるかもしれません。この美しい「日出ずる国」を訪れるのは、今回で 2 回目になります。一度目の訪問は十数年前のことであり、強く心に残っています。日本を愛し、第 2 の祖国である日本の地に骨をうずめることを切に願った、ゼノン修道士の跡を継げることを、とても喜んでいました。

日本の様々な町を訪れながら、助けを必要としている人々を探しながら奔走するゼノさんの跡を追っている感覚に陥りました。東京、横浜、長崎の通りを歩きながら、自分なりにゼノさんの存在を感じました。長崎では、ゼノさんが使っていたであろう同じ路面電車に乗りました。長崎で、1930 年 4 月 24 日にゼノ修道士とともにマキシミリアノ・コルベ神父が降り立った港に向かう途中、髭を生やしたフランシスコ会修道士を覚えているという人に出会いました。子供たちとともに、助けを必要とする人々への募金活動を行うために、学校に来ていたそうです。その時の感動は忘れられません。有名な（フランシスコ会の）教会、殉教者の記念館と記念碑を訪れながら、原爆によって死にゆく人々の苦しみを目の当たりにした、ゼノさんの気持ちを想像しました。奇跡的にフランシスコ会修道院と伯父が無事であったことに、神に感謝しました。 日本の仲間の修道士たちと東京にあるゼノ修道士墓所を訪れた際には、幸運にも、ゼノンの友人であり、頻繁にお墓参りに来るという老夫婦に出会いました。その時、神が示される人生の道がいかに私たちの理解を超えているか実感しました。修士論文を描いていた時、神が正にゼノンの足跡に私を導いていることに気付きました。ゼノンでさえ、若い頃は、修道士や聖職者になることは夢にも思っていなかったのですから。

（ゼノンは）裕福な家庭に生まれた、普通の少年として、人生を謳歌していました。流行の服でお洒落をするのが好きで、いつも高級な革靴を履いていました。イケメンで、明らかに身なりに気を配っていました。彼に「目をつけていた」女性は一人ではありません。青年期には事業を立ち上げ、ビジネスマンになり、彼の夢と心と共にあったポーランドのために働こうと考えていました。信心深くも、多少頑固なところがあり、必ずしも両親の言うことを聞くわけではありませんでした。ある日、泥炭の採掘で一儲けしようと思い立った彼は、両親の反対を押し切って家を出て、北部で泥炭の採掘ビジネスを始めました。あいにく事業は倒産し、共同経営者に騙され、多額を失いました。

ゼノンは非常に愛国的な家庭の出身であり、当時の多くの若者同様、自由なポーランドのためにすべてを捧げて戦う覚悟をしていました。ここで忘れてはならないのは、当時ポーランドは、123 年間にわたって世界地図上に存在していなかったということです。

機会が訪れると、ゼノンは新兵徴募委員会 に年齢を 3 歳上乗せして偽り、軍に応募しました。ボリシェビキと戦い、ワルシャワ近郊の前線で負傷しました。治療後は部隊の後方支援を担当しました。神の救いか、ポーランドは 1918 年に独立を果たしました。当時、彼は若者の衝動で愛するポーランドのために働き、自由なポーランドを謳歌し、その発展を見守りたかったのです。分割占領時代、占領者は愛国的な家庭の子供たちに母国語による教育を禁止していました。

ゼノンは技術に秀でた少年でした。熟練した職人たちに様々な技術を個人的に習っていました。落ち着かない性格で、旅することを夢見ていました。何度もアメリカへ行ったことのある祖父の影響かも知れません。習得した様々な実践的な技術は、後に修道士となってから、とりわけ宣教活動中に役立ちました。軍で出会った友人の影響と御受難会の司祭が呼びかけた修養会に参加したことを機に、御受難会の修道会に入り、神と祖国に尽くすことを決意しました。然しながら、ノービス（修練者）の受け入れ待ち期間が長過ぎて待ち切れなくなり、フランシスコ会に入会することを決意します。ある日、ワルシャワへ出かけ、フランシスコ会修道士たちと連絡を取り合いました。間もなくして、グロドノ（現在のフロドナ）にあるフランシスコ会修道院で修練者となり、そこでマキシミリアノ・コルベ 神父と出逢いました。

コルベ神父はローマの大学で学んだ後、出版によるキリスト教の布教活動を志していました。グロドノの修道院で最初の印刷所を作り、そこで冊子「無原罪の聖母の騎士」を創刊しました。その後、ワルシャワの近郊の地に、二エポカラヌフ修道院と発行所が誕生します。ゼノンが実践的な技術に精通しているのを知ったマキシミリアノ神父は、彼をポーランドのニエポカラヌフ修道院建設の責任者にしました。間もなく、ポーランドのニエポカラヌフは世界最大規模の修道院になりました。ニエポカラヌフは独自の、自給自足の小さな町であり、数百人のフランシスコ会修道士たちの家でもあります。

技術の才能、陽気な性格、聖母マリアへの信心、福音の伝道の熱意から、マキシミリアノ・コルベ神父、ゼノン修道士、ヒラリオ・ウィサコフスキ修道士の三人は極東への宣教に向かうことになりました。1930 年 4 月 24 日三人は長崎に降り立ちます。一時的に地元の司教の元に滞在し、何と 1 か月後には日本語の創刊号「無原罪の聖母の騎士」を発刊しました。やがて、長崎の山の麓に（聖母の騎士）修道院と発行所（聖母の騎士社）を建設しました。

6 年間の滞在後、マキシミリアノ神父はポーランドに帰国し、アウシュヴィッツ、占領下の南ポーランド、クラクフの近郊に建てられたナチス・ドイツの絶滅収容所において、家族を持つ父であるガヨヴニチェックの身代わりとなり、命を捧げました。ゼノンは長崎の原爆で被災しながらも、奇跡的に生き抜き、住む場所を失った子供たち、孤児たちのために孤児院を作ります。その後、戦争で壊滅的な被害を受けた日本の都市のあちこちに、雨上がりのキノコのように、アリの街のようなバタヤ街が出来ました。

日本の人々は、ポーランドの宣教師の愛すべき心を見抜き、感銘を受け、彼の慈善活動を支持しました。ゼノンは自分の奉仕活動に人々、子供から学生、大人までを巻き込む天才でした。その中でも特別なのは、カトリック教会によって尊者とされている北原怜子さんです。

少年時代のゼノが、修道士の道に進むとは夢にも思っていなかったのと同様、私も全く考えたことさえありませんでした。聖職者や修道士といった生き方に関心を持ったことは一度もなかったのです。

もちろん、毎週日曜日には教会へ行き、祈りを捧げ、良い子供であろうとしました。侍者を務めたこともありませんでした。仲睦まじい 7 人家族の カトリックの愛国的な家庭に生まれて、幸せな子ど時代を過ごしました。何不自由なく育ちました。幼稚園に入る前には、読むこともできました。子供のころから興味があったのは、技術、DIY、建築や自然でした。自然の美しさを見つめること、空を見上げ、雲が漂い去っていく様を見ているのが大好きでした。何にでもワクワクしていましたが、一番のお気に入りは自分の手でレンガの家を造ることでした。

ゼノン修道士は国を発った後、ただ一度だけポーランドの家族を訪れています。それまで私たちは伯父を、伯父から送られてきた手紙や写真からしか知りませんでした。ゼノン修道士は 1971 年に数週間にわたりポーランドに帰国しました。家族にとっては大変嬉しい出来ことでした。ゼノン修道士はその時私に、どのような高校に進学し、将来はどのような仕事をしないのか尋ねました。誰しもそうであるように、私にも様々な将来の夢やしたいことが沢山ありました。きっとそれは、技術系の仕事だと思っていました。機械技師、エンジニア、家の建築家、航海士、パイロットなどです。しばしば姉のクリスティーナや他の子供たちとともに空を見上げ、小さな飛行機を眺めてはワクワクしていました。飛行機が大好きで、二人の従兄が、一人はアメリカで、もう一人はポーランドでパイロットをしていました。彼らのようになりたかったのです。当時は、修道士や神父になるとは、思い付きもしませんでした。普通の幸せな家庭生活について考えたこともありました。

1971 年にゼノン伯父に会い、人生について長く語りあった時、伯父は私にこう言いました。「ユーレチュクー（イェジの愛称）、神が君の人生をどのような仕事に導かれようとも、一番大切なことは、良い人間であることだ！」。その時はいまいちピンと来ませんでした。常に良い少年であろうとしていましたし、家でそのように躾けられていたからです。家族はゼノン伯父に、ポーランドに残るよう説得しました。伯父は、「日本に帰らねばならない、やることがまだ山ほど残っている！」と言い、年老いても自らが生涯を捧げた人々に囲まれて過ごすのが望みだと話しました。家族は伯父の選択を受け入れました。最も近い人々への手紙に、ゼノン伯父は、いつか家族の誰かが自分の跡を引き継いでくれるよう祈っていると書いていました。写真からも分かるように、伯父は偉大な心の持ち主であり、日本の皆さまから愛され、家族の誰もが伯父を誇りに思っていたにも関わらず、前述したとおり、私には日本の伯父の道を進む気は毛頭もありませんでした。

ポーランドが分割支配されていた時代、ロシアは多くのポーランド人をシベリアなどへ流刑し、強制労働に就かせました。シベリアにいた 800 人近いポーランドの孤児たちを全滅から救い出したのは、日本政府でした。この事実に感銘を受け、ゼノン伯父が日本に対し自ら「恩を返したい」、日本の孤児たちが必要としているときに、全力で助けたいと考えたのは確かです。私は小中学校を卒業すると、機械の職業学校、その後シュチトノの有名な機械高専へ進み、充実した生活を送っていました。そう、私は機械技師、エンジニア、建設士になりたかったのです。高専の途中で、それは 6 月のことでした。予期せぬ悲劇が起こりました。

ある日の午後、クラスの仲間たちが湖へキャンプに行く途中、悲惨な事故に遭ったのです。友人の一人、ズジシュは即死し、もう一人は重傷を負い、更にもう一人もかなりの大怪我を負いました。その日、本来なら私もその車に乗っているはずでした。入院した母の見舞いに行ったことで、命を救われたのです。ズジシュの葬儀には若者を乗せたバスが何台も連なり、大きな衝撃となって私の心に残りました。その後、二度目の死が家族に訪れました。義兄が事故で亡くなり、幼い甥が重傷を負いました。この二つの出来事を機に、人が生きる意味や儚さ、予想できなさ、選択の結果について考え始めました。高専を卒業し、高校卒業資格試験を合格後、長い間人生について考えをめぐらした結果、自分の残りの人生を神と助けを必要とする人々に捧げようと決心しました。

私たち家族と親しいプシェミスワフ御受難会の修道会に必要な書類を提出しました。ですが、1 週間後、私がフランシスコ会に入らなかったことを知れば、日本の叔父は喜ばないかも知れないと思い直し、書類を取り下げました。それが理由で、私は御受難会に提出した書類を取り下げ、フランシスコ会修道会に入会しました。在学中には既に、

宣教に興味を持ち、行きたいと思うようになりました。そこで「桜咲く国」が思い浮かんだのは、当然のことでした。ルブリン・カトリック大学の修士論文は、ゼノンとその日本における活動について書くことにしました。

私が大学卒業間近だった頃、フランシスコ会のワルシャワ管区が分割されることになりました。新しくグダンスクに管区ができることになり、地元に近いことからそちらに所属することになりました。グダンスク管区は中央アフリカ、ケニアへの宣教を担うことになりました。宣教への準備が整った、意欲のある者を必要としていました。管区長の提案もあり、私はケニアに行くことにしました。そこに 7 年間滞在しました。アフリカの地で素晴らしい時を過ごしました。アフリカが大好きになり、今でもケニアにおける宣教を支援しています。私たちフランシスコ会修道士は、必要とされる地に赴く点で、兵士に似ていますが、それはそこで神と人々に仕えるためです。その後、カナダへ向かい、2015 年からアメリカのボストンで司祭をしています。今日は、私たち皆にとりまして素晴らしい日を、この場所で皆さまと共に過ごせることを、心から嬉しく思います。

グダンスク、ワルシャワ、クラクフの管区長、またカナダ、アメリカの仲間たちからの、心からのご挨拶をお伝え致します。大使をはじめ、この素晴らしい集いを開催いただきました関係者各位に篤く御礼申し上げます。また、私と同様に、ゼノン修道士を誇りに思っている、アメリカの従兄たちからもご挨拶申し上げます。中には、ゼノンが存命中に彼を訪ねた者もいます。ゼノンの甥であり、私の一番年長の従兄であるジョー・ジェブロフスキは、アメリカ軍の戦闘機パイロットとして、長崎でゼノンと再会しています。当時彼は、ゼノンを航空母艦に招待し、仲間の乗組員に紹介しました。 その時ジョーは、歓迎会を催して、ゼノンにインタビューを しました。その後、アメリカ軍は沖縄の基地からゼノンの活動を支援し、恵まれない人々へトラック何台分もの食糧、毛布、その他日用品を送りました。ジョー・ジェブロフスキは 1957 年に空中衝突に遭いました。本人は、自分を救ったのは神だが、ゼノン伯父も協力してくれたに違い無いと、語っていました。従兄のジョー・ジェブロフスキは数年前に亡くなり、カリフォルニア州のサンディエゴにある軍人墓地に眠っています。

この大切なひとときを共に過ごせることに、皆さまに改めて感謝致します。日本の皆さまに心からご挨拶申し上げます。日本とポーランドの友情が今後も生き続けますように。ゼノンが日本、ポーランド、そして全世界に神の祝福をもたらしますように。

尚、現在、ゼノンに関するインターネット・サイトを準備しています。アドレスは: **www.brotherzeno.com** ですので、ぜひご覧いただければと存じます。また、皆さまがポーランドをご訪問くださることを願っております。